

ゾォーダー伝【第二稿】

遠野 秋彦

プロローグ

ゾォーダー5世大帝が子供の頃。

彼はまだ大帝ではなかった。

父親が、ゾォーダー4世大帝を名乗っていた。

今は、リゾート惑星に親子で遊びに来ていたのだ。

臣下も少なく、珍しくゾォーダーは父親と二人きりで夜空を見上げていた。

「息子よ」

「はい、父上」

「おまえが継ぐべきこの帝国をどう思う」

「最強です」

そこで父は笑い出した。

「どうされましたか?」

「本当に最強だと思うか?」

「はい。どの星も我が帝国によって占領されています。我が国に勝てる星などありません」

「では問う。どうやって占領するのだ?」

「白色彗星を進撃させれば」

「ダメだ。星を破壊してはそこから富が得られない」

「ならばバルゼーに命じて艦隊を出して降伏させれば」

「艦隊を建造するにも動かすにも金が掛かる」

「しかし、既に支配下に入った星の奴隷どもが富を産み出し続けているはずでは……」

「奴隷は無限ではない。むしろ保護を必要としている存在と言える。初代が征服した国家の奴隷で生き延びている種族があると思うか?」

「で、でも父上」

「奴隷は生産性が低い。環境も悪いし意欲も低いからだ。教育も不完全だから世代を重ねると質も落ちて数も減る。だから、次々に新しい星を占領して補充し続けねばならないが、それにも限りがある。そして、我が帝国には予算を必要とする者達が増え続けている」

「でも、白色彗星を進撃させればどのような星であろうと勝てるのでは」「確かにその通りだが、それではダメなのだ。たとえ戦争に勝っても経済的に我が帝国は破綻する」

「まさか……」

「予算の消費を抑えられれば良いのだが、それもできん。戦いで功績のあった家々への配慮も必要なのでな。恩賞を出さねばこちらが寝首を搔かれる。いや、恩賞を出してもだ。このままでは未来がないことは、見る目を持った者にはよく見えておる」

「しかし、予算が限られているのでは、誰を殺したところで……」

「いや。金を使うライバルさえ落とせば、予算は足りるわけだ」

「えっ」

「アンドロメダ星雲で、未征服の星域は限られている。おまえの治世の途中でそこも使い切るだろう。つまり、おまえの治世の途中で阿鼻叫喚の内紛が起こることは目に見えておる。臣下同士が争い、忠臣が主君を裏切るだろう。いや、それはもう始まっているかもしれぬ」

「そんな」

ズオーダーは口をぱくぱくした。

「嘘ではない。実はこのようなリゾート惑星に来たのも、謀反の計画ありという情報から、謀反を回避するためなのだ。今頃、都市帝国では反乱摘発のために警備部隊が動いているところだろう」

「そんな大それたことが本当に」

「あくまで噂レベルなので、本当かどうかはわからん。あくまで念のための措置だが」

「父上が死んで大帝の地位を移譲など嫌です」

「ははは。それは心配しなくても良いだろう。おまえが大人になるまで、

それほど深刻な問題は起きないはずだ」

「ならば良いのですが」

「ではおまえに問おう。どうすれば良いと思う?」

「奸臣をあぶり出して処刑すれば」

「意味がない。問題は、予算を浪費する凡庸な臣下なのだ。彼らには特に落ち度は無く、切ることはできない」

「なら帝国を一度壊してゼロから作り直します」

「ははは。それは無理だ」

「なぜですか」

「世の中には、自分の帝国を作れる男と、作れない男がいる。初代は確かに自分の帝国を打ち立てたが、そのすべはもう残されていない。我々は、この帝国を少しでも延命させるしかないのだ」

「しかし……」

「良いか覚えておけ」

「はい」

「この父もおまえも、自分の帝国を自分で作れる器ではない。きら星のごとく手足のように働く臣下を揃えて始めて自分の帝国を作れるが、それには彼らを統率するカリスマが必要だ。しかし、父にもおまえにもそれは無い」

「そんな気弱な父上など見たくはありません」

「気弱? いや、おまえの行く末を案じているのだ。おまえは滅びを定められた帝国を背負うのだ。その運命を打破する力がおまえにはたしてあるのか。それを見定めたいと思っているところだ」

「そんな、父上!」

「それに……」

その瞬間、父親の胸を凶弾が貫いた。

父親の堂々とした身体が、驚きと苦悶の表情と共にゆっくりと倒れていった。

「父上!」

テラスの手すりに黒いものが見えた。

誰かの頭だ。

しかし、影になっているから黒いのではない。

全身が黒装束なのだ。

同じような黒装束の男達が何人も続いた。

ズォーダーは悲鳴を上げて後ずさった。

「なんだおまえ達は」

しかし、男達はズォーダーには構わなかった。

死体の確認に忙しいようであり、壁際に下がったズォーダーに注意を向ける者はいなかった。

それに気付いたズォーダーは、テラスから室内に入ろうとした。室内に入れば警備担当者と呼ぶ通信機もあったからだ。しかし、動きはすぐに気付かれた。ズォーダーは護身用の銃を構え牽制した。しかし、黒装束の男達からテラスの隅に追い込まれていった。

ズォーダーは目の前の人数を数えた。

7人いる。拳銃は護身用の小型だから弾は5発しか入っていない。しかし、それも当たればの話だ。そして1発で仕留められればの話だ。1人でも残れば、相手は大人だ。取り押さえられるのは目に見えている。

いや、取り押さえられるどころではない。

殺されるかも知れない。

もう終わりなのか。

ズォーダーはまだ終わりたくなかった。

ダメで元々と拳銃を撃った。

弾は外れた。

ズォーダーはその直後に、強引に銃を奪われた。

弾倉が空になるまで撃つことすらできなかった。

これで万事休すか。

そう思った瞬間、頭上に轟音が響いた。

黒づくめの男達が驚いて見上げていた。

ズオーダーも見上げると、兵員輸送ヘリがホバリングしてそこから白い服の者達が降下してくるところだった。

「そこまでだ!」

スピーカーががなりたててた。

すぐ乱戦が始まった。

ズオーダーの前には、1人だけ立派な男が降り立った。

「大丈夫か、サーベラー」

更に頭上からズオーダーと同年代のまだ幼い少女が降り立った。やはり白い服と白いスカートををはいている。

「大丈夫よお父様」

男はニヤリと笑った。

「では、王子様を頼むぞ」

そして戦闘の渦に飛び込んでいった。

「き、君は?」

少女が振り返りもしないで答えた。

「サーベラーという名前です、陛下」

「なぜここに?」

「この星はすべて敵の息が掛かっています。これだけの騒動が起きているのに、警備の者達が出てこないのもそのせいです。それに気付いて助けに来ました」

「そ、そんな。敵って誰?」

「ザバイバルです」

「そんな。交戦中のどの星でもなく臣下じゃないか」

「そうです。交戦中のどの星でもなく臣下です」

「そんな馬鹿な!」

そうは叫んだものの、ズオーダーには何が起きているのかよく分かった。未来が見える臣下が帝国の共食いを始めたわけだ。そして、最初に狙われたもっとも警戒が薄い者が大帝だった、というわけか。

少女が目の中の敵を、手に持った小銃で撃ち殺した。少女の身体には余

るほど大きな銃であったが、それを軽々と使いこなした。

「陛下、私の後ろから出ないで!」

「う、うん」

やがて戦闘は終わった。

大量の死体が残ったが、戦闘は白い少女側の勝利であった。

「陛下ご無事で」

と少女の父親がにこやかに戻ってきた。

ゾーダーはホッとした。

しかし、次の瞬間、まだ生きていた敵の銃口がゾーダーを狙った。

「危ない!」

少女の父親だけが間に合った。射線に身体を投げ入れたのだ。

その結果、銃弾はゾーダーに当たらなかった。

「お父様!」 白い少女が叫んだ。

彼女の父親は戦士の安息の場所に旅立った。

第1章・側近

そして、その日からゾーダーは幼い大帝に即位し、最も信頼される側近として白い服の少女、サーベラーが立つことになった。

この日の出来事が全て計画された茶番であったことを、ゾーダーが気付くことはなかった。つまり、ザバイバルに翻意はなく、黒装束も白い服の戦士達もすべてサーベラーの配下であり、実は死んだ彼女の父親も騙されていたことにだ。彼女の父親は、あくまで大帝を助けに来たつもりなのだ。しかしサーベラーは実の父親すら射殺させた。家の実権を握るためだ。

そこまで計画して遂行する能力がある以上、幼いサーベラーは優秀であった。裁判でザバイバルを有罪に持ち込むと彼の予算を大幅に削って財政を救った。ザバイバルは獄死し、その息子がザバイバルの名を継いだが、もはやザバイバル家に彗星帝国全陸軍を統括する名家の名残は残らなかった。

もっとも、ザバイバル家を没落させ、出費を減らせばそれだけで財政を

立て直せるかと思いきや、やはりそれだけでは無理というものだった。

サーバーにも妙案はなくゾオーダーも途方に暮れた。

ゾオーダーは配下を見渡した。

サーバーは隙あらば食らいつく恐ろしい女だとは思っていたが、敵もしたたかで滅多に隙は見せない。

レーザーは先代から続く臣下のトップであり、信用して良い男であったが、それほど冴えているわけではなかった。

ゲーニッツは、ザバイバル没落後、宇宙艦隊のトップとして大きな顔をしていたが、宇宙酔いするので自分は乗艦しないという情けなさだった。

バルゼーは最強艦隊のトップであり、実働部隊の頂点であった。問題は、常に金を食いすぎることであった。白色彗星で蹴散らせばアツという間に勝てる戦いでも、バルゼー艦隊の見せ場を作らねばならず、しかもそのための予算は常に過大であった。

ゴランドはバルゼーよりもあてになったが、実体弾しか信用しないと言い、独自開発したミサイル艦隊を保持してバルゼーとは一線を画していたが、維持費は高めだった。

ナスカは小艦隊を保持して情報収集活動を行っていて、これまた金食い虫であったが、有益な情報を持ってくるので割れなかった。

そのナスカが報告してきた。

「大帝、ご報告いたします」

「なんだ」

「隣の銀河系からの長距離探索艇が戻りました」

それは距離があり過ぎて金食い虫の任務だった。

「何か面白いものはあったか？」

「単に隣の銀河系に到達して戻っただけではありますが、興味深い話を 1 つ持ち帰りました」

「なんだ？」

「テレザート星です。100 年は我々よりも技術が進んでおります」

「なんと。敵にまわると脅威かも知れぬな」

「しかし、どうやら最終戦争の最中のようで、互いの陣営の人命をほとんど殺し合っていました」

「そうか」

「しかし、最終的にテレサという女王が全てを滅ぼして1人だけ残ったとか」

「テレサか」

「いかがいたしましょう？ テレサは無視しますか？ それとも使節団を送りますか？」

「よし決めたぞ。テレサを敵と見なそう」

「はっ？」

「聞こえなかったのか。白色彗星帝国はこれより隣の銀河の征服に取りかかる。そのための最大の障害となる敵がテレサということだ」

「しかし何のために」

「分かっているだろう。アンドロメダ銀河はまもなく征服し尽くす。とすれば、収入も頭打ちとなる。これを打開するには、隣の銀河系を征服するしかない」

「その通りです」とサーベラーも相づちを打った。「この宇宙の全ては大帝のもの。逆らう者がいてはなりません。使節団などもっての他です」

しかし、ズオーダーの思惑は違った。

外敵の存在が結束を促すのだ。テレサが本当に脅威になるかは疑問だった。たった1人で何ができるというのか。しかし、外敵や大きな目標があれば、内部が結束する。下らない謀反でエネルギーを無駄遣いしないで済むのだ。それに非常時であると宣言すれば予算の無理も通りやすい。しかも、テレサには敵として何かをしでかしてくれそうな期待感もある。

「ナスカよ」

「ははっ」

「第2次探索隊を送り出すのだ。今度は戦闘準備として念入りに重複2段索敵も行うように。何もかも逃すなよ」

だが、ズオーダーに言えるのはそこまでだった。

実務的な段取りはサーベラーに任せるしか無かった。

きめ細かい指示がサーベラーからナスカに出されたが、それらはゾーダーにはどうでも良いことであった。ただ、サーベラーの女性的な性格がうとましかったが、この臣下の中で本当に信用できるのはサーベラーぐらいだったので仕方がない。そして、サーベラーがテレサを軽んじていることも良く分かった。サーベラーの敵は他の臣下達であり、外敵など全て軽視の対象なのだ。これは悪い傾向だとは思ったが、意見できることではなかった。確実に味方になってくれると信じられるのは昔からの忠臣であるラーゼラーを除けばサーベラーぐらいだったからだ。

ラーゼラーがサーベラーを信用していないことは知っていたが、それはラーゼラー家が予算を食い過ぎるとしてサーベラーから攻撃されているからだ。ラーゼラー家が格式に相応しい体面を保つために必要な予算が多額になるのは致し方ないとゾーダーは思っていたが、確かに削れるものなら削りたい予算である。そして、隙を見せればサーベラーの手によってラーゼラー家も没落させられ、予算も削られてしまうだろう。

第2章・遠征

彗星帝国は全体として緊縮財政モードに入り、戦闘部門に予算がつき込まれた。

その状況は驚くほど多くの事務処理を発生させた。

ゾーダーはそれを投げ出したが、それはサーベラーによって処理された。

ますますゾーダーはサーベラーを手放せなくなった。

探索の結果、いろいろなことが分かってきた。

この銀河にもいろいろな種族がいるが、まずはテレザートであるということ。銀河系で最も美味しい地域、つまり征服すべき地域はその先のナントカ連邦だということも分かった。そして、テレザートとナントカ連邦の中間にある地球という星を巡って、星間戦争があったこと。しかし、地球は100年は遅れている星なので、数だけ宇宙戦艦を揃えていても恐るるに

足りないこと。地球の敵は、隣の島宇宙から来たガミラス帝国であることも分かった。

ガミラス帝国は、滅び行く惑星でデスラーという男が成立させた帝国だと分かった。

ゾォーダーはナントカ連邦にはあまり興味を持ってなかったが、デスラーと一度遭ってみたいと思ったので、ナスカにそれとなく指示を出した。

しばらくして届いた連絡は悲痛だった。

デスラーは敗北して、既に死んでいるというのだ。

しかし、ゾォーダーの真意を理解しないサーバーが指示した。

「死体でいいから回収して大帝と対面させなさい」

その願いは叶えられた。

宇宙空間を漂流していたデスラーの死体が回収されたのだ。

しかし、予想外の朗報もあった。忠臣達が脱出させたらしく、遺体の損傷も少なかった。宇宙空間で保存が良かったということもある。医師軍団は、これなら蘇生させられると大小判を押した。

改造と蘇生を経てデスラーは蘇った。

慌てて医務室にゾォーダーはそれを見に行った。

青い皮膚の男、デスラー。

この男は、自分で自分の帝国を作れる男だ。

自分で自分の帝国を作れない自分とは大違いだ。

そのとき、デスラーは目覚めた。しかし、まだ意識は朦朧としているようだった。

「ここはどこだ」

そこで、ゾォーダーはベッドに駆け寄って告げた。

「白色彗星帝国である。私は大帝ゾォーダー」

するとデスラーは即座に答えた。

「ヤマトには手を出すな」

ヤマト？

聞いたこともなかった。

「ヤマトとはおまえの大切な土地か?」

ならばこの男の目の前で奪ってやろうとゾォーダーは思った。

「違う」

「ならば大切な女性か?」

「そうではない。敵だ」

その瞬間、ゾォーダーは雷に打たれたような衝撃を受けた。

そうか。己の敵はあくまで自分で決着を付けるというのか。

そう言って睨んでいるデスラーの瞳こそ、自分で自分の帝国を作れる男の目なのだ。

そしてこの彗星帝国の大帝に相応しいのは、自分ではなくデスラーであることも理解した。おそらくデスラーはヤマトを倒した後で、自分を殺して彗星帝国すら奪っていきたくらうと思った。

デスラーとはそういう男だ。

しかし、ゾォーダーは初めて問題を解決する光明が見えた気がした。

デスラーは白色彗星帝国を滅ぼし、代わりとなる新しい荒々しい帝国を打ち立てるだろう。デスラーはそれができる男だ。だが、それによって全て問題は解決されるだろう。この男は、さしたる落ち度の無い臣下を平然と切り捨て、殺せる男だ。

「デスラー。おまえの話聞かせてくれ。いかにしておまえは自らの帝国を作り、そして滅んだのかをだ。一部始終を聞かせてくれ」

「ヤマトは……」

「分かっている。我々の敵はテレザートのテレサだ。ヤマトは敵として必要としていない。おまえにくれてやろう」

「ふふっ。感謝する」

テレサ戦会議は最初から紛糾した。

というのは、あまりにも情報が少なく、過小評価から過大評価までがずらりと並び、そのどれが正解かも分からなかったからだ。

しかも、テレサの配下には艦隊がないので、それを蹴散らすバルゼーの

出番がない。かといって、テレサがどのような装備を隠しているか分からないので、出番はなくともバルゼーを出すのも危険すぎる。

ズォーダーの考えは最初からシンプルだった。単純に銀河系に入る進路上にテレザートを起き、踏みつぶすだけだ。白色彗星のパワーで潰してしまうのが最も安全確実と言えた。しかし、それでは危険すぎるという者もいたし、逆に見せ場がないので不満であるという声も多かった。

テレザートは手出しせず放置し、前衛の威力偵察隊と地球の艦隊の接触も起こるようになったが、まだ結論は出なかった。

そこで意外な報告が寄せられた。

白色彗星の野心に気付いたテレサが通信を発し、それに呼応するように地球の宇宙戦艦がテレサと接触するために向かったというのだ。

その地球の戦艦の名はヤマト。

皮肉な運命のイタズラとズォーダーはほくそ笑んだ。

テレサ戦会議の基本方針はまとまった。

銀河大戦にまで発展することは何としても避けたかった。それだけの経済的な負担に彗星帝国は耐えられないからだ。従って、テレザートの先進的な技術が地球やナントカ連邦にまで流れることは避けねばならなかった。

そのためには、テレサをテレザートに封じ込め、ヤマトはテレサと接触させないことが基本方針であった。そうすれば、白色彗星はテレサを蹴散らし、デスラーが地球を蹴散らし、そしていよいよ全力を持ってナントカ連邦を叩きのめせるはずであった。戦いの基本は各個撃破なのだ。

テレザードの封鎖にはゴーランドの艦隊を派遣することになったが、それがバルゼーには不服であった。見せ場を取られると思ったのだろう。他に取り柄のないデーニッツが仲裁に入って、バルゼーには、決戦前の肩慣らしとして地球艦隊を殲滅させるために出撃させるとして、納得してもらった。しかし、実際にはバルゼー艦隊を動かす予算も足りなかったのだ。

そしてもう1つの問題はデスラーであった。

本当なら、地球攻撃はテレザート攻撃の後になるはずであり、それまでゆっくりとデスラーはヤマト討伐の準備を行う余地があったはずなのだ。し

かし、ヤマトがテレザートに出航して時期が早まった。

さてどうしたものかとゾーダーが悩んでいると、デスラー自身が謁見を申し込んできた。

「大帝。命を助けていただいたご恩をついに返すときが来ました」

デスラーはそう言ったものの、こいつも隙あらば私を殺そうとするだろう、とゾーダーには思えた。しかし、悪い気分ではなかった。それこそが本来あるべき男の姿なのだ。

更にデスラーは言った。

「どうかヤマト攻撃のための出撃をお許し下さい」

言葉は丁寧だが真意は違う。形の上では恩があるから許可を求めているだけだが、実際は「ヤマトは自分だけの獲物だ」という承認が欲しいだけなのだ。つまり、ヤマトには手を出すな、と言いたいのだ。

「よかろう。戦力は十分か？ 必要なら我が方の新鋭戦艦部隊を……」とそこまで言って、レーザーに睨まれているのに気付いて言い直した。「我が方の新鋭駆逐艦隊を貸しても良いのだが」

メダルーザを基幹とする新鋭戦艦部隊はバルゼーの虎の子、彼が手放すわけがないのだ。出せるのはせいぜい駆逐艦だろう。

しかし、デスラーはあっさり辞退した。

「ご心配には及びませぬ。我が大ガミラス帝国、母星が滅んだとはいえ、小マゼラン星雲の戦力は手つかずのまま。それを糾合すれば、かなりの戦力になりましょう」

「しかし、もう存在しない帝国の総統なのに、彼らが命令に従ってくれるというのか？」

「失礼ながら大帝」デスラーはニヤリと笑った。「このデスラーが生きている限り、我が大ガミラスは不滅です」

その瞬間に理解した。この男は、生きている限り支配者なのだ。国家など無くなればまた作ればいい。そういう男なのだ。

「では行って参ります。失礼」

デスラーはマントを翻して立ち去っていった。惚れ惚れするような男ら

しい態度だった。

「監視艦隊指令ミル」

サーベラーが叫んだ。

「はっ」 優男が前に出てきた。

「おまえもゆけ。デスラーを監視するのだ」

ゾォーダーは、男の生き様に突然水を差された気がした。デスラーはヤマトを倒すだろう。そして、自分を殺してこの帝国を救ってくれるだろう。それなのに、デスラーの行動が信用できないというのか。

だから、「女だな。サーベラー」とつぶやいてはみたものの、さすがに信頼できる忠臣の判断に異議は差し挟めなかった。

しかし、サーベラーの判断に非があったとも言い切れない。というのは、隷属国家の軍隊には必ず連絡と監視を行うための将校を派遣することになってきたからだ。その際、一般将校ではなく監視艦隊指令を、しかも大帝に心酔して忠誠心も高い男を派遣するなど、破格の好待遇だったからだ。デスラーは今ひとつ信頼できないが、かといってデスラーびいきの大帝の機嫌は損ねたくない、というサーベラーなりの判断がそこにはあった。言ってみれば、大帝のお気に入りのペットに最上級のエサを与えて見せたようなものだった。まさか、大帝が自分と同格あるいはそれ以上の支配者と見なして遇していたとは思わないサーベラーであった。

第3章・帝王

だが、ゾォーダーもサーベラーもしばらくデスラーのことは忘れてしまった。

というのは、アンドロメダ星雲から離れた白色彗星内では、娯楽が足りないという問題が顕在化したからだ。リゾート惑星に気楽に降りられない銀河系間宇宙で、不満の爆発を抑えるために様々な娯楽が企画された。特にパーティーは毎晩のように開催された。

ゾォーダーはパーティーの主賓として、出席しなければならず、しかもどっしりと座ったままダンスにも参加できなかった。警備の都合上、透明

の防弾バリアの内側から出ることができなかったのだ。できることと言えば、小姓が取ってくる料理を食べることだけであったが、銀河系間宇宙で新鮮な食材を入手できる確率は低く、ほとんどは冷凍食品であたし、料理人が手を入れる細工のレパトリーもすぐに尽きた。

一方で、水を得た魚のように生き生きとしていたのがサーバーだった。彼女は綺麗なドレスを着込んで談笑し、ダンスを繰り返した。自分の命が狙われる危険など、まったく意に介していないようだった。時々会場から男と一緒に姿を消していたのは、いったい何をしていたのか考えるだけ野暮というものだったのだろう。ついでに、しばしばそのまま一緒に消えた男が行方不明になってしまうことも。

この退屈な時間に終止符を打ったのは、ゴーランド戦死という報告であった。

テレザート封鎖を任されていたゴーランドは、ヤマトと交戦して艦隊を壊滅させられ。ゴーランド自身も戦死したという。

一方で、デスラーはといえば着実にヤマトを追い込んでおり、ヤマト撃滅は時間の問題と思われた。

このニュースの波紋は大きかった。

ゴーランドといえば、大帝からの信頼も厚かった人物であり、それなりに有能でもあった。それゆえにテレザート封鎖という任務も与えられた。やや趣味が奇矯という噂はあったが、それはさほど問題ではなかった。浪費の多いバルゼーよりも、ゴーランドの方がよほど良いという評価もあった、しかし、そのゴーランドが死に、デスラーは生きて勝利を掴もうとしていた。

つまり、デスラーはゴーランド以上、バルゼー並の待遇を得られる可能性が具体的に出てきたのだ。それは、大帝の謁見室に常駐する権利を意味し、その場合には決まった序列はなかった。だから、大帝がお気に入りのデスラーを隣に立たせるという可能性も現実的にあり得たのだ。そうなったとき、昔からの忠臣ラーゼラーや、押しかけ女房的なサーバーをけ落として、デスラーが彗星帝国を実質的に牛耳るナンバー2 に成り上がる可

能性も出てきたのだ。

そういう囁きがズォーダーの耳に届かなかったわけではない。しかし、事態はズォーダーの想像を絶する展開を見せることになる。

デスラーが戦場を放棄して帰還したという報告がもたらされたのだ。

「そんな馬鹿なことがあるものか。あの男はそういう男ではないはずだ。何か理由があるはずだ」

しかし、サーベラーは明快に否定した。

「いえ。恐ろしくなって逃げてきた臆病者ですわ」

そういえば、忠臣のゴーランドも死んだという。ゴーランドほどの男の死を見ればあるいはデスラーも……。

「ならば見下げ果てた男だ」

ズォーダーは裏切られた気分で一杯になって、そのままデスラーのことは忘れてしまった。どのみち、もう遅いのだ。ゴーランド亡き後、デスラーも逃げてしまえばテレサはヤマトと接触してしまうのだ。

ズォーダーが真相に気付くのはもう少し後になる。

実際は、デスラーを脅威と見なしたサーベラーとレーザーが手を組んで、偽の帰還命令を出してデスラーを呼び戻したのだった。これ以上、デスラーに手柄を立てさせる訳には行かなかったのだ。デスラーという共通の敵を得たとき、対立していたサーベラーとレーザーすら手を組むというのは、ズォーダーの想像外であった。その結果、デスラーは召還され、客人待遇も剥奪され、ズォーダーと会う機会も与えられず、幽閉されたというわけである。といっても何ら特別の待遇ではない。反逆国家の元首としては普通のことであった。デスラーには反逆が実際は無かった、という点を除けば。

しかし、状況は展開が早かった。

白色彗星はテレザートに迫り、そしてテレサの自爆によって損害を与えられ、進路も変わってしまったのだ。

外部を軽視しがちなサーベラーが狼狽したのは予想通りだが、これほど

の損害とはズォーダーとしても予想外であった。テレサを甘く見ない、という気構えがあったズォーダーですらそうなのだ。

レーザーとサーバーは慌てて修復の対応に走り回ってくれた。おかげで隙ができたのだろう。

白色彗星は、ガミラス艦隊の接近を許してしまう。

ズォーダーが気付いたのは、既にデスラーが逃亡した後だった。

サーバーが金切り声で叫んでいた。

「逃げたデスラーを殺せ！」

ズォーダーは何かがおかしいと思った。

そして明確な疑惑が浮かんできた。

デスラーは確かに逃亡した。しかし、単なる逃亡は死刑には当たらない。なのに、なぜサーバーは殺そうとしているのか。逃亡者を撃ったときに不可抗力で殺してしまうことはあれど、捕獲できればそれに越したことはない。なのに、なぜサーバーはデスラーの死を望んでいるのか。

そうか。

そういうことか。

敵前逃亡するような男を部下が助けに来るものか。

サーバーは誤解したのだ。

デスラーに立場を奪われると。

だから、周囲まで騙して嘘の命令で拘束していたのだ。

そんなことはあり得ないのに。

デスラーが狙っているのはサーバーにとって代わりズォーダーのナンバー2になることなどではない。ズォーダー自身にとって代わって帝国のナンバーワンになることなのだ。

そこでズォーダーは宣言した。

「今後一切、デスラーとの縁を切る。もう会うこともない。これでいいか？ サーバー」

「は、はい、大帝！ 嬉しい言葉でございます！」

「ならば、デスラーの持ち物は全てデスラーに返してやれ」

「は？」サーベラーの喜びの表情が戸惑いに化けた。

「ドックにデスラーの旗艦が残っていただろう。全ての私物を詰め込んで持って行かせろ」

「それでは、あやつの戦力が充実してしまいます」

「構わん。あいつの敵はヤマトであり、ヤマトと戦うには戦力が必要だ」

「もし、我々に敵対することがあれば……」

「旧式艦ばかりの小艦隊に何ができる。その場合は、ひねりつぶすだけだ」ズォーダーはそう断言した。

サーベラーの表情は明るくなったが、ズォーダーは思いも寄らない剛胆な方法でひねり潰されるのは我々の方だと確信していた。

さあ、デスラーよヤマトを倒してこい。こちらはテレサを倒したぞ。後は、最後の決戦を互いにやるだけだ。

しかし、相変わらず頭痛の種は尽きなかった。

問題はやはりバルゼーであった。バルゼーの艦隊には国家予算の半分以上を取られているが、バルゼー自身が愚鈍すぎた。しかも、ライバルとも言うべきザバイバル家が没落し、その没落したザバイバル家も若い党首の復帰への野心がサーベラーに見透かされてテレザートに送り込まれていた。そして、彼はテレザート星でヤマトの陸戦隊に敗北して戦死した。唯一の歯止めとも言えたゴーランドも既に無く、ナスカは弱小すぎ、デーニッツは歯止めにならなかった。サーベラーやラーゼラーには外敵と戦うことにさしたる興味はなく、もはやズォーダー自身が考えるしかない状況だった。

こんなとき、デスラーならいったいどうするのだろう。

ズォーダーはそう思ったが、事態の推移の方が速かった。

思っただけで行動できない鈍重さがそもそもズォーダーの弱点であったが、そのときのズォーダーはそれどころではなかった。

バルゼーの空母部隊が奇襲を受けて壊滅したという。国家予算の数分が一瞬で消えたのだ。

肩慣らしの前哨戦のつもりが、主力の半分を失ったようなものだった。

即座にゾォーダーはバルゼーに連絡を入れた。

「バルゼー。これ以上の損害を出すわけにはいかん。地球艦隊など白色彗星で蹴散らせば良いものだ。帰還してこい」

「それはできません」

「なぜだ」

「ここで負けて戻ったら、そこの」

そう言ってバルゼーは大パネルでちらりとサーバーを見た。

「その女狐にバルゼー家は取りつぶされてしまいます」

「バルゼー、言うことを聞け!」

「では失礼いたします」

通信は一方向的に切られた。

「バルゼー艦隊を支援する。白色彗星を不可視モードに入れて急行させよ!」

ゾォーダーは命じた。

しかし、間に合うか否かはぎりぎりだった。

もしここでバルゼー艦隊が壊滅してしまっても、もはや未来はない。たとえ、白色彗星でいかなる敵に勝てるとしても、帝国が必要としているのは勝利ではない。奴隷と資源を持った惑星を占領することなのだ。そのためには、艦隊が必要なのだ。それが無ければ帝国は自壊する。デスラーに滅ぼされるまでもない。自壊してしまうのだ。

白色彗星が通常モードに復帰して姿を現したとき、既に戦闘は終わっていた。バルゼーの敗北という形で。

「ほほほほ。これでバルゼー家を取りつぶす大義名分が得られたというものです」サーバーは勝ち誇ったように笑ったが、ゾォーダーの心境は複雑だった。バルゼー艦隊壊滅という結末は、あまりに予想外であったのだ。

しかし、その衝撃を表に出す訳には行かなかった。

白色彗星が地球艦隊を蹴散らしていることも意識になかった。それよりも、目の前の地球に心を奪われた。青く美しい星だ。

「美しい星だな。あれを頂こう」ゾォーダーは言った。「白色彗星を止め

よ」

勝利者が悠然と降伏を求める、という態度でズォーダーは命じた。

しかし、心中は穏やかではなかった。

本来なら、地球は通過点に過ぎないはずであった。場合によっては前線基地を置いて役立てる程度の認識でしかなかった。しかし、地球人を奴隷として使い、地球の資源で艦隊を再建せねば白色彗星に未来はない。いわば背水の陣であった。支配者、帝王としての振る舞いはそれを隠すためのフェイクであった。

だが、ズォーダーは半ば悟っていた。もはや、薄氷のような未来しか自分には存在しないことを。

そして、真上から地球の航空機が、真下からミサイルが迫ってきたとき、その薄氷が割れたことを知った。真上と真下、それは大帝自身がデスラーに教えた都市帝国の弱点だったはずだ。

第4章・宿敵

ズォーダーは予想外の事態に狼狽した。

地球はデスラーの敵だったはずではないのか。

あれほどヤマトと戦うことにこだわっていたはずではないのか。

しかし、ようやくズォーダーは重要な事実気付いた。

デスラーを不当に長期間拘束した帝国はデスラーの敵になったのだ。

デスラーは敵を攻撃するために手段を選ばない男だ。

そのために手段として敵すら使うだろう。

デスラーすら地球側についたとなれば、もはや勝ち目はない。

「敵はヤマト1隻です」

「なに、デスラーの艦隊も一緒に攻撃してきたのではないのか？」

「いえ、ヤマト1隻だけです」

ならば勝てる。ズォーダーは確信した。

どうやらデスラーは完全にズォーダーの敵にまわったわけではないようだ。そうではなく、ヤマトに入れ知恵し、ズォーダーを窮地に追い込んだ

上で対応を見ているのだろう。つまり、ゾォーダーに対してヤマトに「勝ってみせろ」と要求しているらしい。そして勝った方をデスラーがひねり潰すのだろう。

ならばその要求に応じて見せよう。

ヤマトではなくゾォーダーこそが、おまえに殺されてやる価値があることを、証明してやろう。

「ヤマトから決死隊が乗り込んできます!」

「すぐ守備隊を向かわせろ」

「いいえ。その必要はありません」と澄ました顔でサーベラーが言った。

「なんだと?」

「たかが僅かな蛮族ではありませんか。警備兵だけで十分です」サーベラーは涼しい顔で言った。

その瞬間にゾォーダーは理解した。

内部抗争には熱心なくせに、対外情勢にはほとんど興味を示さず、戦闘にも余計な首を突っ込んでねじ曲げていく。勝てるはずの戦いもこの女が絡めば敗北していく。

そもそもデスラーにそれほどの翻意があったわけではない。少なくともヤマトを倒すまでは帝国と戦うつもりはなかったのだろう。その流れが変わったのは、この女がデスラーを偽の命令で召喚して拘束したからだ。

とすればそれが悪行の全てとは思えない。おそらく、バルゼーの敗戦も背後でこの女が何かをしていた可能性が……。

次の瞬間、謁見室の電源が落ちた。

「どうした!」

「報告します。ヤマトの決死隊に動力炉を爆破されました。予備電源に切り替わります」

しかし、灯りは戻らなかった。

「なぜだ。なぜ予備回路に切り替わらない!」

「分かりません」

「三重の予備回路があると聞いているぞ」

「は、確かに回路はあるはずなのですが。一度も使ったことがないので、どれがそうなのか……」

そうか。この都市帝国を建造したのは、遠いご先祖であり、誰も全貌を把握していない……というわけか。確かに修理はできるが、壊れた箇所を特定して直すだけだ。こういう場合の対処方法はすぐ分からないという訳か。

「どれぐらい時間が掛かるのだ？」

「謁見室だけなら3時間もあれば」

「だけ？ だけとはどういう意味だ！」

「都市帝国全体の復旧となると、何日かかるか……」

「その間に、ヤマトは何回都市帝国を滅ぼせると思っているのか！」

「し、しかし」

「もうよい。都市帝国は放棄し、緊急用戦艦で脱出する」

「なら我々も一緒に」

こんなとき、デスラーなら何と言うだろう。

そうか、簡単だ。

「ならん。責任を取って死ぬ。おまえとおまえと……」ズォーダーは若く忠誠心の高い近衛兵数名を選んで指名した。「おまえ達は一緒に戦艦に乗り込め。残りはここで死ぬ」

「それでは人員が足りず、ほとんどの兵器は使用できません！」

「構わん。どのみち、おまえ達に使い方は分かんたろう」

そう厳しく断言すると、誰も返事をしなかった。

「さあ、乗り込め」

ズォーダーは命じた。

追ってきたのは、サーベラーだけだった。

「大帝、私を置いていかないで！」

サーベラーの目は、忠臣の私を置いていくのかと懇願していた。

しかし、それがフェイクであることをズォーダーは良く分かっていた。

ズォーダーはハッチを閉じて発進を命じた。

「非常用戦艦を出せ」

ズオーダーは艦橋に上がると、部下を見渡した。

「どうだ。使い方は分かるか？」

「最低限の航行は何とか。しかし慣性が大きすぎて思い通りに進路を変えられるか」

「照準は合わせられるか？」

「主砲は無理です。操作パネルは全て古代ガトランティス語で誰も分かりません」

「下部の殲滅砲なら撃ち方は知っておる。王族の認証がないと撃てないようになっておるから、使い方の説明は受けておる」

「分かりました。なんとか敵母星に艦首を向けます」

「馬鹿者、母星を吹き飛ばしてどうする。あの衛星に向けよ」

「なぜでありますか？」

こいつは馬鹿かとズオーダーは思った。

死んだ蛮族は奴隷にできないではないか。脅して使役する必要があるのだ。

「ヤマトです！」

他の誰かが叫んだ。

ズオーダーは初めてヤマトと向き合った。

満身創痕、使用できる砲塔すら残っていないのに、戦意が落ちていない。

ズオーダーの砲撃を阻止すべく、迫ってくる。

あれが、デスラー執心のヤマトなのか。

そして思った。

ヤマトをここで破壊すれば、デスラーは怒って殺しに来てくれるだろう。

だが、艦首はヤマトには向かず、命じた通り衛星にやっと向いた。

改めてヤマトに向けよという命令を出そうとしてズオーダーは思いとどまった。移動しつつあるヤマトを狙っても当たらないだろう。それよりも、今は力を誇示した方が良い。

ズオーダーはそのまま認証シーケンスに入った。手のひらを台に乗せて

から、発射ボタンを押し込んだ。

「発射!」

そして、戦艦下部から巨大砲が発射されて、衛星の一部が吹き飛んだ。

どうやら軸線がずれて衛星の中央に当たらなかつたらしい。

しかし、破片がヤマトに当たって、損害を増やしている。

ヤマトの速度が目に見えて落ちた。

それでも前進をやめない。ヤマトの戦意は落ちていない。

ズォーダーは恐怖して叫んだ。

「この宇宙は私のものなのだ。全ての生き物は私にひれふすのだ。あらゆる生き物の血の一滴まで私のものなのだ!」

部下が気を利かせてその言葉を発信していた。

通信パネルの中で、胸に赤い矢印が付いた服の男が何か叫んでいた。ヤマトの指揮官らしい。

しかし、ズォーダーは自嘲していた。

これは建国したご先祖の言葉を真似てみたに過ぎない。

本当はそんな力などズォーダーには無いのだ。

その瞬間、誰かが叫んだ。

「テレサだ!」

速度の落ちたヤマトを追い越して、テレサの居城であるテレザリウムが宇宙船となって迫ってくる。

「死んでいなかったのか! テレサ!」

ズォーダーは思った。

テレサだけには勝ちたい。

そしてやっと分かった。

だから、デスラーもヤマトにだけは勝ちたいと願ったのか!

そして、ズォーダーは悟った。

デスラーに勝つ方法が1つだけある。

それはテレサを倒すことだ。

デスラーはヤマトを倒しきれなかったから今ヤマトがここにある。

しかし、ゾォーダーにはまだテレサを倒すチャンスがある。

「戦艦をテレザリアムに向ける!」ゾォーダーは命じた。

「無理です。慣性が大きすぎて正確に狙えません」

「狙う必要など無い。ぶつけるろ! テレザリアムにこの戦艦をぶつけるのだ!」

ゾォーダーにとって幸運だったのか不運だったのかは分からない。

しかし、最低限ゾォーダーの意図する進路変更だけは実行可能だった。

体当たりを意図する戦艦とテレザリアムは必然的に同じ場所で交差し、そして高エネルギーが放射されて両者は蒸発して消滅した。

エピローグ

その衝撃波は地球を離れつつあったデスラーにも到達した。

「なんだこの衝撃は」

「ただちに1隻引き返して調査させますか?」

「その必要はない」

「しかし、正体がはっきりしません」

「ふふっ。わかるさ」

「総統、いったい何ですか?」

「白色彗星帝国が負けたのであろう」

「総統!」

「あの帝国はもともと滅びに瀕していたのだ。我が帝国と同様にな」

「まさか。我々も」

「我が大ガミラスは死なんよ。このデスラーもな」

「しかし、現にガミラス帝国の版図は残っていません」

「それが重要なことかね?」

「当然です。このままでは武器も食料も燃料も補給できません。我が艦隊は行動不能になって朽ち果てます」

「支配すべき惑星が無ければ新たに占領すれば良いのだ」

自分で自分の帝国を築ける男は、軽やかに笑った。

おわり

執筆方針についてのメモ

- 本作は基本的にさらば宇宙戦艦ヤマトではなく宇宙戦艦ヤマト2のゾォーダー大帝について扱う（ただし、一部はさらば宇宙戦艦ヤマトに似た展開になっている部分もある）
- ズォーダー視点で物語を展開させるが、その結果として宇宙戦艦ヤマト2の非常に多くの展開が割愛される。ドラマの大半にズォーダー本人が関与しないからである
- 宇宙戦艦ヤマト2で最も面白い要素は、大帝王のズォーダーの帝国が足元から崩壊していく部分にあり、分かっているながら阻止できなかったズォーダーの無念こそが見どころであると言う観点から構成される
- ズォーダーはヤマトをデスラーに任せていたので、ほとんどヤマト乗組員は登場しない。その代わりに、宿敵はテレサとして一貫される
- 西暦2013年の段階で執筆され2014年の段階で公開されるのは、分かっているながら破局から自国を救えない悲劇は現代日本とかぶるからである。つまり本作の彗星帝国は、現代日本のメタファーである（この説明が分からない読者が多いであろうことも意図されたメタファーのうちである。本作では、彗星帝国臣民の多くも自らが滅びに瀕していることを分かっていたと解釈して記述されている）

遠野秋彦作品宣伝 2013/12/14 版

リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカーレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡

受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか！そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか！

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊！

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメrikaは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ！

ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として扱われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

セラ姫物語【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通の子供高生星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも.....。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？ だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラは GM なのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説!

君は腕力では無く知力を試される!

ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか! 勇者の伝説を! このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を!

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF 版】

http://www.dlsite.com/maniax/work/=product_id/RJ039225.html

イーネマス! 【立ち読み版(全 16 章のうち第 5 章まで。無料) PDF 版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来入制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり

